

第49回中国・四国地区子ども会育成研究協議会

兼 第54回香川県子ども会指導者・育成者研究大会

第1分科会 指導者・育成者部会「地域で支える子ども会」記録

I 全体の流れ

- 14:40～15:15 開会・あいさつ兼スタッフ紹介
- 15:15～15:20 香川県子ども会育成連絡協議会 専門委員 野郷 光宏 氏
「子ども会の活性化をめざして
ー今こそ、子ども会に入会しましょうー」
- 15:15～15:20 質疑
- 15:20～15:50 三豊市子ども会育成連絡協議会 専門委員 安藤 清和 氏
「三豊市子ども会育成連絡協議会のアンケート調査分析・
市子連の課題について」
- 15:50～15:55 質疑
- 15:55～16:05 休憩
- 16:05～16:40 観音寺市子ども会育成連絡協議会 指導者 藤田 晃三 氏
協議（ワークショップ形式）

II 詳細

①香川県子ども会育成連絡協議会 専門委員 野郷 光宏 氏

「子ども会の活性化をめざしてー今こそ、子ども会に入会しましょうー」



野郷氏より、自身の体験談をもとに今こそ子ども会の入会をしましょうと提案していただいた。

今、子どもたちに生き抜く力を身に付けられるのは、子ども会である。子ども会活動では、適応力、判断力、コミュニケーション力が自然と身に付き、豊かな人間へと成長することができる。

近年、保護者が子ども会活動を避ける傾向にある。スポーツ少年団等、社会活動の選択肢の増加により、子ども会への加入率が低下していると思い、PTAの副会長に子ども会担当を任命し組織替えを行った。その他、加入人数の少ない単位子ども会を合併、加入人数の多い単位子ども会を2つに分ける等、編成し直しを行った。また、子ども会名を加入者に考えてもらい、自分の子ども会に親しみが持てる様にした。

子ども会活動では、毎月第3土曜日に小学校の校庭を開放し、遊具等を利用した自由遊びを行った。また、小学校では集団下校をしていなかったが、単位子ども会で集団下校を行う

ようにした。

組織編制や子ども会活動を改革していった結果、おやじ会やおかみ会等、地域主体の組織ができ上がった。しかし、それも今では減少傾向にある。

災害等が起こった際には、子ども会単位の組織が重要になってくると思う。子ども会の加入率を上げるため、小学校にて子ども会の担当教諭を決める等、学校の協力も得ながら、子ども会の入会をすすめている。



②三豊市子ども会育成連絡協議会 専門委員 安藤 清和 氏

「三豊市子ども会育成連絡協議会のアンケート調査分析・市子連の課題について」



安藤氏より、三豊市市子連にて行ったアンケート調査の分析に基づいて市子連の役割について参考となる話をしていただいた。

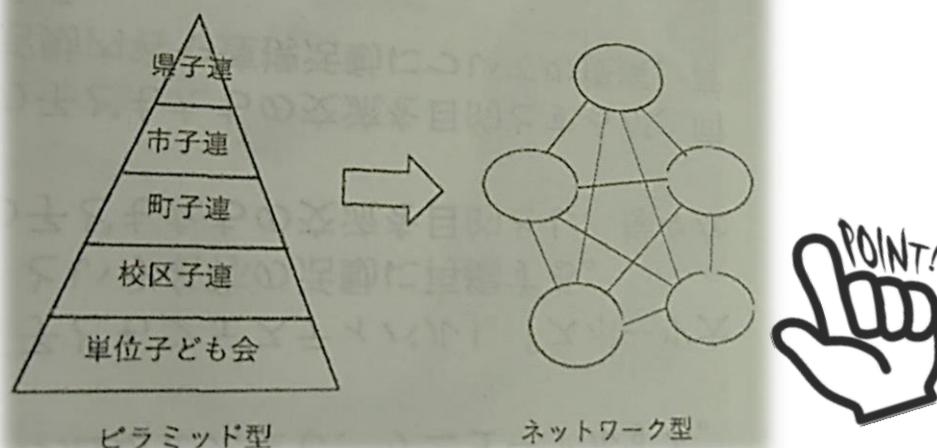
市子連は、地域子ども会活動活性化の支援をする立場である。例えば、JL（ジュニアリーダー）の活性化を支援し、指導者的立場の育成を行う等、大人になって子どもに関わる人の

育成を行う。

三豊市市子連にて行ったアンケート調査の結果、代表者の自由記述欄に「負担」という言葉がよく記載されていた。「負担」だと感じる原因は、各個人の能力だけではなく、モチベーションの問題もあると考え、どうすればモチベーションが上がるのか改善策を検討した。

- ・改善策1：組織の在り方について、規約改正も含めて根本的に変える。
- ・改善策2：改善要望のある全ての活動を見直し、リニューアルする。
- ・改善策3：校区子ども会・町子連への助成を継続するが申請型にする。
また、子ども会安全会は継続する。

規約改正も含めて根本的に変える。



改善策1は、組織についての捉え方を変えた。具体的に言うと、子ども会の組織を階層として捉えず、ネットワークとして捉えることだ。市子連は町子連等の上部組織ではない。それぞれの組織は自立した主体であり、互いに連携する。

組織についての捉え方を変えると、下記のとおり様々なことが変化した。

- ❖ 市子連の理事を市子連活動のスタッフとせず、理事さんには地域の活動に専念してもらう。
- ❖ 市子連の役員を削減できる。
- ❖ 市子連の役員・理事会の回数が減る。
- ❖ 市子連は、地域子ども会活動の活性化を図ることを主旨とする。
- ❖ 地域子ども会の自立的な活動を促すため、校区子連や町子連への助成金は「申請型」とする。

改善策2の具体策として4つ行った。

☆マンネリ化していた「子どもフェスティバル」「スポーツ大会」を「子ども広場」という名称の活動に再編する。

☆子ども広場は、市内の子どもたちの交流を目的とし、様々な団体と連携して行う。

☆子ども広場は、市内の子どもたちの交流を目的とするが、同時に市内各場所での活動内容や連携活動についての提案、育成者の研修も目的とする。

☆子ども会活動発表は廃止し、育成者間の情報交換や研修はHPを活用して行う。

改善策2・3に取り組んだ結果、今までと変化することと変化しないことができた。

➤ 変化すること

①役員数が減る

②役員・理事会の回数が減る

③市子連の事業として活動していた「スポーツまつり」「活動発表会」を廃止する。

④HPを運営し、市内子ども会相互の情報交換を活性化する。

⑤町子連ごとの年度計画に沿った申請により、自立的な運営をしていただく。

⑥県子連委託事業である地域活動推進事業について、従来は活動発表を子ども会へ依頼していたが、今後は応募型とする。

⑦県子連委託事業である指導者養成事業は、年3回程度の研修会を行う。

➤ 変化しないこと

①市子連より1校区15,000円の助成をする。

②県子連の活動発表については、これまでのローテーション通り行う。

③子ども会安全会については、従来通り、3月に単位子ども会に申込していただく。

三豊市市子連のアンケート調査結果分析による取組を紹介した。子ども会に関する課題はいくつかあるが、子ども会活動の意義を再認識し、変化に対応できる柔軟さをもった活動が大切だと考えており、三豊市市子連は現在も上記のように運営を行っている。



**③観音寺市子ども会育成連絡協議会 指導者 藤田 晃三 氏
協議（ワークショップ形式）**

藤田氏による協議では、まずグループ内で1人1分間自分を自慢するという自己紹介を行い、参加者の空気をほぐした。

次に、協議1「あなたにとって、『地域で支える子ども会』の『地域』とは、具体的に何（誰）ですか？」をグループ内で協議した。協議1の後は協議2「出てきた支えるべき『主体』ごとに、『具体的にどのように支えたらよいと思いますか？』」を協議した。協議1・2

が終わると、各グループでまとめと発表を行い、藤田氏から総評をしていただいた。

(この協議のねらい)

①支える主体は多様であり、主体によって取り組むべき内容やスタンス、程度は違ってくるため、参加者の考えている主体(地域)は、何(誰)をイメージしているかの整理と共有を、まずは大切に臨んでもらうこと。

②いずれの主体においても、支えようと努力することを推奨・賞賛する一方で、より良い方向性へ向かうための更なる支援メッセージや、より良くなるための具体的な手法や事例などがあれば、それらの相互紹介や共有のための分科会の場として、参加者交互を繋げたい。

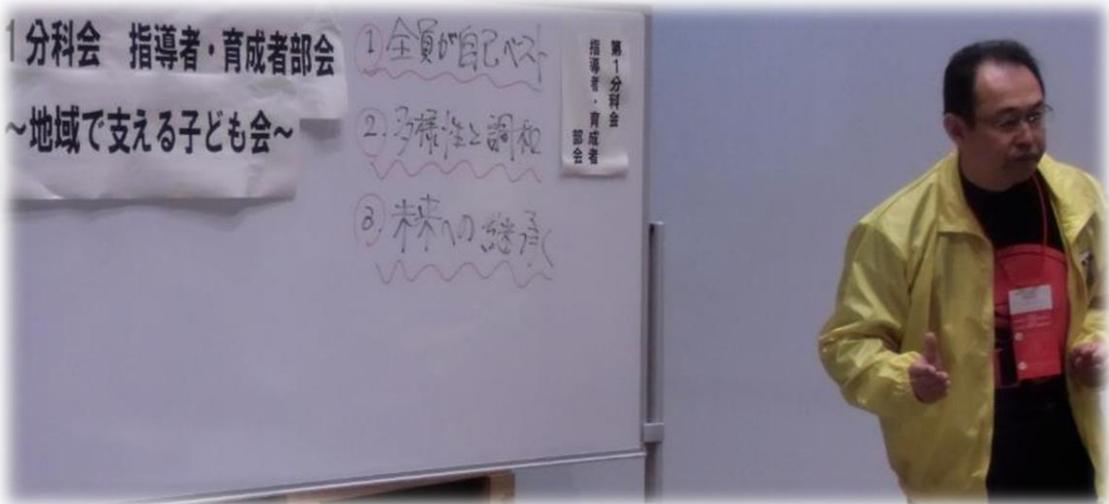


協議とまとめの結果、各グループ様々な発表ができた。最後に、藤田氏から総評として大事な3つのキーワードを提示していただいた。

1. 全員が自己ベスト

2. 多様性と調和

3. 未来への継承



この3つのキーワード提示を締めとして、第1分科会は終了した。